

2016/2/27 P4C 研究会 報告

於大阪大学中之島センター

by Masugata

参加者：小学校教員 2 名、中学校教員 2 名、高校教員 1 名、大学教員 1 名

西宮市立の小学校の 5 年生が西宮市大谷記念美術館で松谷武判作の「波動」を鑑賞し、その後、作品を前にして自分の感じたことや疑問を発表し合うという授業記録を考察。

子どもの発言を起こしたものを参照しながら、授業のビデオ記録を見て、参加者によるコメントと討論。

授業の流れ（全体で約 25 分、児童は 30 名ほど）

子どもたちは作品を 3 分間ほど自由に見た後、輪になって座り、毛糸球のコミュニティーボールを使って、議論するという形を取る。学習のねらいは「作者や作品の知識にとらわれることなく実際の作品と積極的にふれあう事によって、感性を働かせながら多様な発見をする事」。

子どもたちの発言の流れは、最初は、作品のタイトルが「波動」ということであったので、ダイレクトに波の動きと発言する子、「雲」みたいな感じ、「上から雨が降っている」、「砂浜に打ち寄せる海の波」、そして「などの意見が出される。さらに、「躍動感」があるという発言が続く。

先生はこれらの発言を受けて、子どもたちの印象がタイトルに引っ張られ、議論の展開がないと判断し、波動という言葉でイメージするのは違った見方をした子はいない、と問いを出す。先生のこのファシリテートの仕方は、非常に適切であったと思う。

この先生の問いかけに対して、

「蛇が動いているような感じ」というように、絵の印象を具体的なものに例えて述べる子がまだいたが、子どもたちの発言は、その「波」の様子を、「波じゃなくて、涙が出ている様子で、水が溜まっているのは涙の流れを一瞬のところにとらえている」、「大きな波が、どンドンやってきて、地面が、何か奪っているような感じ」、そしてこの発言を受けたせいか、「津波がきて、絵の上の方は津波のためにごちゃごちゃになり、盛り上がっている線は、瓦礫のように見えて、下はまだ上よりもきれいだから、津波に押されてはいないみたい」というような、具体的な描写を伴う発言があった。

児童の一人は、最初、「波なんだけど、あの芸術作品は、波の瞬間とか、波が終わったみたいな様子を表しているとか、水たまりにも思えた」と発言していたが、友だちの意見を聞

いて、「波じゃなくて、涙が出てきているような感じで、そこの一瞬をとらえているのが、水たまりのように見える」というように、自分の意見を更に具体的に展開するようになった。

この子の発言を受けて、別の子が「瞳から涙がでているとか」と発言すると、最初「雲」と言った子が、「悲しみがあふれ出してるような感じ、心の動きとかによって何か、変わってきたり、これは悲しいかなって思いました」という発言をして、ある意味、その後の議論の流れを作っていた（この子は後で、「悲しみを掬っているのかなって思いました」という発言をした）。例えば、「涙が波みたいひろがっているのかなー」、「私も、ずっと、他の人の意見を聞いてて、全く何か違う考えが浮かんできて、最初、Aさんは水たまりみたいと言ったのを聞いて、その水たまりに雨が落ちてきてその後に、涙が広がってきたみたいに思えました」、「涙とか水をスプーンで受け止めているような感じが、他の人の意見を聞いて、しました」「描いた人はやはり悲しい気持ちを涙で表したと思う」「描いた人はその時悲しい思いで描いたのかな」という発言が続いた。

さらに、一人の子は、最初絵の様子を、下はハッキリして上は形がハッキリしていないと言ったんだけど、それはなぜかなーと考えていて、瞳という言葉聞いて、その理由が分ったような気がする」という思考の流れを説明したり、他の疑問を述べるということをした。この子はP4Cが何か問いを立ててそれを考えるという活動であると理解して、このような発言をしていたようである。そして、この子は、友だちの「瞳とか水たまりとか、いろんなものが想像できる感じ」という発言を受けて、「いろいろあるんですけど、じゃー、えっと、その一、名前、波動という言葉の意味とか、そういうのって何だろうって考えたら、何かいろいろ発信するようなことも、そういうのが繋がってくるもとも、いろいろあると思います」という発言をした。これは、正直すごい発言をする子だというのがその時の私の印象であった。

先生は、この子の発言を受けて、「今ちょっと、波動という言葉に、誰かが注目したんだけど、確かに、水だとか涙とか、そういった時も波という言葉とかを連想するよね、今、世間の動きとか言った子もいたし、波動っていろんな言葉への広がりがあると思うんだけど、何か、波動という言葉で、思いつく言葉、ことってある？」という形で受け止め、議論をさらに展開しようとした。これも、素晴らしいファシリテートだと思う。また、単に「波動という言葉の意味は何だろう」という問いの形を取らないで、「波動という言葉で思いつく言葉やことはあるかな」という形で問いを出しているのも、子どもたちの発言をしやすくしたと感じられる。

先生のこの問いを受けて、子どもたちは、「悲しみという感情の動き」、「平和の中に何か衝撃を与えてそれが伝わるというイメージ」、「ここの展示室にある絵がすべてが悲しみを伝えているという感じ」、「何か広がっていくというイメージ」、

また、感情が伝わるということであっても、悲しみではなく、涙を掬ってあげる優しさが伝わってくるという発言をする子（雲と言った子）がいると、「皆とは違って、波動には力強い感じがする」という発言をして、初めて自分の意見を、それも、他の人とは違う意見

を主張したのが印象的であるし、その後、優しさのイメージに対しては、一人の子が「黒というは闇というか、気分的にはやさしい感じの絵もあるとは思いますが、やはり悲しみの方が多いかないかと思いました」と発言し、もう一人の子が「やはり真っ黒なものを見ていれば、どんどん引き込まれていく感じて、心がどんどん悲しくなる」と反対意見を述べる場面が見られるようになった。

以上が子どもたちの発言の流れであるが、先生は最後に、「今沢山の意見が出ましたね。同じ意見の子もいたり、ちょっと違ってという子もいたけど、こんな形で話をして、何か今日振返って発言があった子、思ったことがある子はいいますか。絵のことだけでなくでもいいですよ」と子どもたちに反省あるいは自己評価を促した。

一人の子は、「自分だけの印象を与えるだけじゃなくて、他の人の意見を聞いて、自分の意見が変わることもあるし、納得することもあるし、そうやって意見をぶつけることは改めてすごい大切なことなんだなーと思いました」と一般的な意見を述べたのに対し、二人の子が、教室ではなく美術館でこのような長い話し合いをしたことがなかった、そのような状況の中で、仲間の意見を聞いて、自分の意見を述べていき、自分の意見も変わっていくというのはいいなー、という発言をした。子どもたちは、教室での授業と美術館での授業の違いを肌で感じていたようである。

発言した児童は 20 名

議論がほとんど途切れずに進んでいた。

子どもたちの言葉遣いが丁寧であった。

全体的な印象。

議論あるいは対話というよりも、人の意見を聞いて、自分の想像力を駆使し始めているという様子。通俗的な印象から、想像力を生かした意見へ。素晴らしい文学的な表現（悲しみを掬った、優しさと悲しみという言葉 S1）。最後の方で違う意見や、反対意見が自覚的に提出された。

絵、特に抽象画に対する解釈では間違っているということはない（正解はない）ということが子どもたちには自覚されているようで、教室の授業よりも、自分の意見が言い易いし、他の人の意見とは違うということも言い易い。

あらかじめ、問いを用意することも考えられる。例えば、どう感じたかをいろいろ言ってくれたけれど、画家は何を伝えたいと思う、ということから、さらに、画家はどんな思いで描いたと思う、というくらいのもの。ただ、今回は、自分で問いを作っている子もいたし、「波動の意味」を問う展開になっていったので、短い時間ながら、反省的思考も促されたように思う。

例えば、この授業を受けたうえで、次の授業で問いを作って議論したり、「波動」というタイトルで絵を描かせてもいいだろう。特に後者の場合、図工科で P4C を行う意味が明確になると考えられる。これからの図工の授業での展開をフォローすると面白い。

参加者からの意見

担任の先生に是非とも参加してもらいたかった。

普段の授業とは違う子どもたちの姿・発言に対して参加者たちがどのようなコメントをつけるか、それを知って欲しかったのと、それを受け止めた上での議論をしたかった。

それぞれの子どもの発言から、その子が普段教室でどのような様子であるかが、想像でき、それが、担任の先生が普段思っていることと同じか、それとも違うのか、ということが議論できる。

美術館で座って実施する場合は、糸玉のコミュニティーボールよりも、例えば、新体操で使うボールのようなものの方がやり易いのではないか。

自分も大谷記念美術館で授業をやってみたい。

もう一つの授業も大変興味ある展開となっていた。

例えば、「真っ黒な中に立体感がでていて、何か存在を表そうとしている」といった発言、「絵の上部が昨日で、下部は明日」という発言を受けて「唇のように盛り上がっているところは、過去が凝縮されて今があるっていう感じ」という発言などがあった。これをどう評価するかは大変難しいかもしれない。

先生は前の授業を受けて「波動」に関してどう思うかを尋ねたが、もちろん、子どもたちの議論の点かは全く違ったものとなったが、それでも前時と共通の「優しさ」とか「悲しみ」とか「重圧」という言葉が出て来た。

そして、振り返りでは、絵との距離によって見え方が違うので、タイトルは「波動」ではなくて、自分で考えることができるとか、こんなにたくさんの方の見方や感情が出てきて、面白い発見があり、みんな個性的だと思う、個性はつぶさないようにしようと思いました、といった発言があった。これらの発言も、それぞれの児童の思いが出ていて、クラスでの位置のようなものが想像できる。